

ないほうのコイルをショートさせるかオープンにするかの違いだ。

オープンにする方法では、万が一スイッチが破損した時などに音がまったく出なくなってしまう可能性がある。一方ショートさせる方法では、回路が確保されているのでスイッチの破損で音が出なくなる心配は少ないが、電磁制動作用や相互誘導作用などにより音質が劣化する可能性がある。実際に両方の方法を試してみただころでは、聴感上あまり気にならないレベルではあるが、ショートすると若干高域の劣化が感じられた。この結果から、サウンド面を重視するならaまたはcが望ましいと言える。

(図3)はタップ線付きのシングルコイル・ピックアップの配線方法だ。このタイプのピックアップは現在すでに絶滅危惧種だが、もし使用する機会があった場合は、必ずこの方法で配線しなければならない。タップ線とホットをショートする方法も考えられるが、

ひとつのボビンに重ねて巻かれているコイルは、電磁的に空間を共有しているため相互誘導作用も強く、一部をショートすると著しく高域が劣化してしまう。このタイプのピックアップでコイルタップを使用する場合は、メーカーの指定通りにホットとアースを接続して使用することが重要だ。

●シリーズ／パラレル・スイッチ

1個のハムバッカーに付いているふたつのコイルでもいいし、独立した2個のシングルコイル・ピックアップでもいいのだが、ふたつのコイルを同時に使用する時、そのふたつのコイルを直列（シリーズ）に接続するか、並列（パラレル）に接続するかを切り換えるスイッチだ。(図4)のaとbはスイッチの右半分の使い方が違うだけで、実質的な差はない。スイッチの右上の端子が空いているので、他の機能と組み合わせる場合にaかbを選ぶとよいだろう。

●フェイズ・スイッチ

やはりふたつのピックアップを同時に使う時、一方の位相をわざと逆にして接続すると、低音がキャンセルされ、鼻の詰まったような音になるのを狙ったのが“フェイズ・アウト・サウンド”だ。

(図5)はピックアップの位相を逆転させるスイッチだ。一時期このスイッチを付ける改造が非常に流行ったが、実際にはそれほど使い途の広い音ではないため、最近ではあまり使用されない。(図5)ではON/ONのミニ・スイッチまたはスイッチ・ポットを使用しているが、代わりにON/OFF/ONのミニ・スイッチを使って、センター・ポジションでOFFとなるようにした例もある。

●バイパス・スイッチ

内蔵されているプリアンプのON/OFFスイッチや、ボリューム、トーンをバイパスさせたい時などに、(図6)のバイパス・スイッチを使用する。プリアンプのON/OFF（アクティブ／パッシブの切替とも呼ばれる）に使用する場合は、クリック・ノイズ対策が必要になることもあるので、P.147の“プリアンプを内蔵する”を参照してもらいたい。

●ON/OFFスイッチ

かつてわざと音を途切れさせる“スイッチング奏法”なるものが流行ったが、そのスイッチング奏法にも使えるし、ジャズ・ベースのように音を消すにはふたつのボリュームを絞らなければならない楽器で、瞬時に音を消したい時にも使えるのがこのスイッチだ。

スイッチをOFF側にすると音が出なくなるという極めて単純なものだが、スイッチによってホットのラインを切るのではなく、(図7)のようにホットをアースに落とすという方法を探る。ホットのラインを切る方法だと、OFF時にホットが宙に浮いてノイズが乗りやすくなるためだ。

図5:位相反転スイッチ。
ホットとコールドを入れ換えるスイッチとも言える。

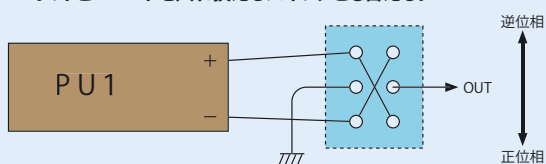


図6:ボリュームとトーンをバイパスして、
直結にするスイッチの配線。

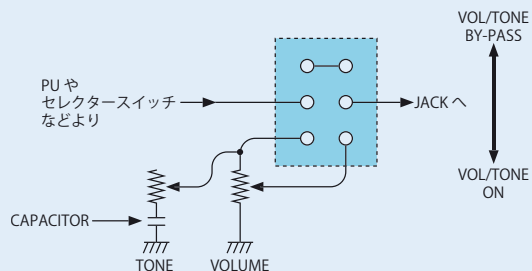


図7: on / offスイッチの接続法。

